



馬耳東風

ゴールデンウィークを1週間後に控えた晴天の午後はこの原稿を書いている。

ここ東京はあっという間に街は新緑に包まれ、新年度に入って早くも1カ月が経とうとしているが、会員諸兄は思い通りのスタートが切れているだろうか？

かくいう筆者はコロナ渦のうちに温めていたイメージがあるにはあるのだが、お恥ずかしながらいざその扉が開くと予想以上の早さの時代の変化に戸惑うことしきりである。

もっと先をみて考え、行動していれば、と思うがすべてあとの祭りである。

さてここ最近、世間の最大の関心事の一つにアメリカの人工知能開発会社 OpenAI が昨年 11 月に公開した人工知能チャットボット、ChatGPT (Chat Generative Pre-trained Transformer) の出現がある。

4月10日、岸田首相は同社のサム・アルトマン CEO と首相官邸で面会した。AI 研究や開発、産業への実装などで世界的に後れをとっているわが国だが、アルトマン氏がサービス公開後初の訪問先として日本を選んだのはとても興味深い。

その ChatGPT、いかなるものであろう？ 実際に「その特色を一言でいうと？」と入力してみると“Chat GPT は、人工知能による自然言語処理技術の一つで、文章生成や質問応答、対話などのさまざまなタスクに対応できる汎用的な AI です”と、回答が返ってきた。

驚くことに実際にこのやりとりはとても自然で、キーボードを介してあたかも実際の人間と会話しているように錯覚するほどであった。情報の精度、活用法、個人情報保護等まだまだ課題はあるが個人的には確定的な未来であると確信している。

さてもう一步踏み込んで、「日本の獣医師の課題と今後の国際化に対する課題を 600 字の範囲で教えて。」とテキスト入力してみた。

“日本の獣医師が抱える課題は多岐にわたりますが、中でも最も深刻なのが人口減少による需要の減少です。日本では少子高齢化が進んでおり、ペットの飼育者数も減少しています。そのため、獣医師が抱えるペットの治療や健康管理の需要も減少しており、今後も需要が縮小すると予想されます。

また、日本の獣医師の国際化に対する課題として、英語力の不足があげられます。国際的な獣医学会議や研究発表などでは英語が必須であり、また、外国人のペットの治療や健康管理にも対応する必要があります。しかし、日本の獣医師の中には英語が苦手な人も多く、そのために国際的な交流や活動に積極的に参加することができないという問題があります。

さらに、日本の獣医師の賃金水準が低いという問題もあります。他の先進国と比較して、日本の獣医師の平均年収は低く、そのために若手獣医師が職を転々とするケースも少なくありません。このため、獣医師不足が深刻化し、地方の小動物病院などでは閉院するところも出てきています。

以上のように、日本の獣医師が抱える課題は多岐にわたります。これらの問題に対しては、より高度な専門性を身につけ、外国語力を向上させ、国内外でのさまざまな活動に積極的に参加することが求められています。また、獣医師の待遇改善や、地方の小動物病院の支援など、社会的な支援も必要とされています。”

AI にこのように分析されたわれわれの将来、あらためてかなりの危機感を持って考えていかなければならない。さあどうするか、このゴールデンウィーク中、必死に考えてみたいと思う。(も)